

vol. 14

京都大学
白眉センターだより



THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER

2 巻頭エッセイ

船曳康子

「白眉とのかかわり」

3-10 シリーズ白眉対談③

「言語多様性と国際語」

—Nathan Badenoch / Bill Mak /

千田俊太郎 / 藤原敬介

11 海外渡航記—武内康則 / Jennifer Coates

12-13 研究の現場から—石本健太 / 鈴木多間

14-15 白眉研究ピックアップ—金沢 篤 / 吉田昭介 / 金 宇大

15 活動紹介—金 宇大

16-17 ポスト白眉の日常—齊藤博英 / 北村恭子 / 樋口敏広

YUMEKUSA エッセイ

雨森賢一「移民と競争の国アメリカ」

18-19 村主さん追悼記事

20 お知らせ—受賞・報道 / メディア掲載記事 / 書籍

白眉とのかかわり

白眉センター プログラムマネージャー 船曳 康子

皆さま、こんにちは。白眉のマネージャーに参加させて頂いて、一年となります。マネージャーとしては若輩であり、白眉研究者の皆さまにそう遠くない年齢となりますので、どうぞ、宜しくお願ひ致します。

白眉のシステムができた当初、私自身がすでに学振特別研究員などの2-3年任期の公募研究職を繰り返しており、白眉の設立に興味を持っておりました。5年間、自由に研究ができるというのが魅力だと思ったことを覚えております。そのような若手研究者の視点で、白眉を存じておりましたので、この度、マネージャーとして関わらせて頂くことになるのは、不思議な感じがしておりますが、私自身が任期制の研究職時代にいろいろ考えたこと、それなりの苦勞と自由を思い起こしております。2年任期の公募職の時には、着任したと思えば、もう次の職も考えないとならない、という何とも不安定な思いをしました。また、白眉の開放的な雰囲気は、私が大学院生時代に過ごした Caltech (カリフォルニア工科大学) 留学と近いものがあり、懐かしい気分でもあります。そこは工科大学ですが、私はその中の行動生物学教室におり、周囲では、物理学、数学、経済学、心理学も盛んで、互いに議論をしながら過ごしておりました。留学前は医学でしたので、まったく異なる学問分野が新鮮で、興味が絶えない日々でした。

少し自己紹介をさせていただきますと、最初は、総合内科医、そのうち認知症を専門とし、地域と連携した臨床研究を行いました。認知症は忘れるわけですが、学問的に追求しようとすると、忘れる前には覚えるはずですので、その記憶形成から忘却までの一連の研究を行いたいと考えました。このために Caltech に留学し、人の言語のモデルとされる songbirds を対象として、生涯にわたる音声発達と記憶の行方の行動学的研究を行いました。親鳥の巣作りからはじめ、50羽ほどの鳥を卵から数年にわたり育て、それぞれの歌の変化を録音し続けました。今どき、このような気の長い研究をする人がおらず、鳥かごや防音箱を一人でたくさん使うことに恵まれました。歌の解析には物理学的手法を取り入れ、視野が広がっていきました。3年半後には帰国となりましたが、その後は、これまでの知見を子どもや地域のフィールドで生かそうと、児童精神科医として、地域と連携した臨床および支援の研究を開始しました。ただし、このような分野があらかじめ用意されていたわけではありませぬので、立場としては、あちこち彷徨い、任期制の公募研究職を繰り返して、その後、病院のスタッフを経て、今に至ります。様々な渡り歩いているように映るかもしれませんが、認知メカニズムに基づいた社会支援という点で内容的には一貫しているつもりでした。この経験のため

か、様々な分野やバックグラウンドからの白眉の研究者、それぞれがしっかり自分なりに地に足をつけて、それぞれのスタンスで取り組んでおられる状況に親近感を抱かせて頂いております。

現在、若手研究者を取り巻く環境は厳しくなっているわけですが、社会や世界が常に変化し進んでいく中、既存の枠組みにない新たな視点が必要なはずだと思っております。そのような研究を目指す若手研究者の立場を温存させる制度が、白眉そのもののように思え、京大にとって、日本にとって、また世界にとって貴重だと思ひます。ですので、白眉研究者は、この5年間のみならずその後まで、白眉出身者として、各研究や分野の柱として、時代の流れを知りながら、流されず歩んで頂けますようにと思ひをよせておひます。

その新たな発想には、専門性の高さとおる程度の自由な時間、それから視野の広さや開放性が必要に思ひますが、白眉はそれらを可能としているのではないのでしょうか。この一年間、多少とも関わらせて頂き、幅広い分野の独創的な研究者が互いに生き生きと議論をしている光景をよく見かけました。分野のみならず、個性も実に様々で印象的でした。このようにバックグラウンドが異なる人同士が意見交換をして視野を広げ、発展させていくことは、新たな発想をする若手研究者にとって、とても重要なことである一方で、そう簡単ではないかもしれません。私の経験上でも、やはりある程度のゆとりが必要でした。

視野の広さは研究分野だけでなく、国際的視野、社会、各自のライフイベントなど多視点があると思ひますが、白眉研究者は、それらとも幅広く対応をされているようでした。この研究成果が5年以内に必ず実る、というわけでもありませんので、白眉の後どうするかについてそれぞれに悩まれるかとは思ひますが、長期的視点でその後に是非生かして頂きたいと思ひます。

と申します私自身も、これからと思うことが色々ありまして、時間を見つけて取り組むようにしております。

(ふなびき やすこ)



白羽の母鳥と家族

シリーズ白眉対談⑬

「言語多様性と国際語」

司会・編集：ニューズレター編集部

登場人物と研究課題

Nathan Badenoch (NB) 東南アジア地域研究研究所准教授（第1期白眉「多様性に対応性—言語からとらえた地域の転換期」）

Bill Mak (BM) 特定准教授『東アジア・東南アジアにおける古代インド天文学の歴史的伝播』

千田 俊太郎 (TS) 文学研究科准教授『パプア諸語および朝鮮語』

藤原 敬介 (HK) 特定准教授『現代語から死語を復元する—チベット・ビルマ語派ルイ語群を例に』

自己紹介

(HK) Hodiaŭ ni havos specialan kunsidon rilate al lingva diverseco kaj internacia komunikado. Jen estas partoprenantoj. Bonvole sinprezentu sinsekve.

(今日は特に言語多様性と国際コミュニケーションに関連して特別な座談会です。では順番に自己紹介をどうぞ)

(BM) Mi estas Bill Mak el la 5a. Mi naskiĝis en Honkongo, kaj mi estas kanadano. Mi diplomigis pri lingvistiko kaj mia ĉefa fako estis sanskrito. Nun mi esploras ĉefe pri antikva astronomio en Azio.

(五期のビル・マクです。香港うまれのカナダ人です。学部は言語学で、サンクリットが専門でしたが、今はアジアにおける古代天文学を研究しています)

(TS) Mi estas Tida. Mi estas lingvisto, ĉefe studas lingvojn parolatajn en la provinco Simbu de Papuo-Nov-Gvineo. Mi ankaŭ interesiĝas en la korea lingvo. Dankon.

(千田です。言語学者です。パプアニューギニアのシンブー地方の諸言語を研究しています。それと朝鮮語もやっています。よろしく願います)

(NB) Mi estas Nate, from the first batch. I'm not a real Esperantist. I'm from US, and I study language and society in Southeast Asia, mostly I'm working in Laos. I will do my best to follow what will be happening, and maybe offer

対談の趣旨説明

白眉五期の Bill Mak と七期の藤原はエスペラントを共通の趣味とし、二人で会話する時はエスペラントを常用している。藤原の受入教員である千田もまたエスペラントをたしなんでいる。一期の Nathan Badenoch はエスペラントをすこし勉強したことがあるほか、人工言語をふくめて色々な言語に興味を持っている。そこで、この四人で国際的なコミュニケーションにおける言語について対談を企画した。対談はエスペラント、英語、日本語が混在している。多様なコミュニケーションの一例として、あえて言語を統一しなかった。ただし、読者の便宜のために、日本語訳（意訳）を併記した。

エスペラントとは

エスペラントとは L. L. ザメンホフ（1859-1917）が 1887 年に発表した人工言語である。ヨーロッパやアジア、アメリカを中心に話者数は 100 万人以上ともいわれる。エスペラントはかぎられた基本語彙と例外のない文法により、習得容易で中立な国際共通語として使用されることをめざしている。京都大学には三高時代からエスペラントのサークルがあり、エスペラントにゆかりがある人物が輩出している。人類学者の梅棹忠夫は熱心なエスペランティストであった（梅棹忠夫 [1994] 『エスペラント体験』モバード新書）。

something in English or Japanese. (一期のネイトです。本物のエスペランティストというわけではないです。アメリカ出身で、東南アジア、特にラオスの言語と社会を研究しています。今日は何がおこるかわかりませんが、英語か日本語で何か言えるといいんだけど)

(HK) Kaj mi estas Huziwara el la 7a. Mi studas ĉefe pri tibeto-birmaj lingvoj kaj en Bangladeŝo kaj en Birmo kaj en Barato. Krome, mi instruas Esperanton en universitatoj de Kioto kaj Osaka. (で、七期の藤原です。バングラデシュやビルマ、インドのチベット・ビルマ系諸言語を勉強しています。京都大学や大阪大学でエスペラントも教えてます)

言語の多様性

(HK) Estas iom granda temo, sed kio estas la diverseco de lingvoj? (いきなり大きなテーマですけど、言語の多様性とは何でしょう)

(BM) La lingva diverseco kadre de Esperanto dependas je la ideo, ke oni kreu, iun komunan lingvon; dume oni daŭre parolusian denaskan lingvon. Tiel ĉiuj fariĝas egalaj, kaj homoj pli bone interkompreniĝas.

(エスペラントからみた言語多様性といえば、共通語をつくって、でもみんな自分の言語は大切に、平等な立場で相互理解しましょうというものです)

(HK) Jes, la egaleco inter homoj el diversaj lingvoj kaj kulturoj estas la plej grava idealo de Esperanto. Kaj por mi la plej agrabla flanko de Esperanto estas, ke esperantistoj estas ĝenerale toleremaj al lingvaj eraroj. En esperantujo, ĉiuj iam estis komencantoj kaj daŭre estas egalaj, do aferoj bone funkcias, ĉu ne?

(色々な言語や文化を背景とする人々が平等な立場にあるというのがエスペラントがもっとも強調する理想ですね。そして私にとってエスペラントが心地よいのは、エスペラントの間違いにわりと寛容であるところですね。エスペラント界では誰もが初心者だったし、ずっと平等な立場なので、うまくいくんじゃないですかね)

(BM) Mia sperto tamen foje estas fakte jes kaj ne.

(でも私の経験では、うまくいく時も、ダメな時もありますね) Ekzemple, kiam ni organizis la kongreson en Hongkongo, ni



2000年香港で開催した第56回国際青年大会での一コマ (BM)。

havis la pekinan teamon, kaj ankaŭ la hongkongan teamon. Ni ĉiam kverelis pri la lingvo kiun ni uzu. Laŭ la pekinanoj, "ni parolu la pekinan, ĉar ni estas ĉinoj".

(たとえば香港で大会をしたとき、北京からのチームと香港からのチームがいました。いつも口論になりました。「わたしたちは「中国人」なんだから北京語をはなすべきだ」というのです)

Por mi tio estas tre strange. Ĉar mi parolas la kantonan, la pekina estas fremda lingvo. Esperanto estu nia komuna lingvo! Tiel ni lernis Esperanton, ĉu ne? Ili tamen protestis, kvankam ili mem estis esperantistoj.

(でも、おかしいですね。香港人は広東語をはなすわけで、北京語は外国語ですよ。エスペラントが共通語であるべきだと習ったはずですよ。なのに彼らは反対しました。エスペランチストなのに) Do, fakte estas multaj tiaj ideologiaj diferencoj inter homoj, aparte ol la surfacaj lingvaj diferencoj. Komuna lingvo helpas sed ne solvos ĉiujn problemojn. Eĉ dum la Universalaj Kongresoj kaj Internaciaj Junularaj Kongresoj, kvankam oni parolas la komunan lingvon, tio ne signifas ke ĉiuj fariĝas amikoj. Tamen la vizio de Zamenhof ja estas bela kaj esperantistoj estas ĝenerale amikemaj pro ties emo de komunikado.

(人々の考え方のちがいというものが、表面的な言語のちがいとは別に存在します。共通語は役には立ちますけど、あらゆる問題を解決するというわけではないのです。世界大会や国際青年大会^{*1}でさえ、みんな共通語を話しているはずなのに、みながみな仲良くしているわけではない。もちろんザメンホフが夢想したことは美しいですし、コミュニケーションにおける理想主義のおかげで、エスペランチストは概して友好的ではあるのですけども)

(HK) Do, en iu senco, Esperanto sukcesis pli ol la antaŭvido de Zamenhof.

(エスペラントはザメンホフの予想をこえて成功したともいえますね)

グローバル英語

(NB) 言葉が同じだから必ずしも仲良く理解しあえるというわけではなくて、やっぱり文化とか歴史とか色んな、その言葉を使ってお互いを深く知り合うことができれば、それは全体としては良くなるんでしょうけど、でもその、すぐに友達ができ、すぐに仲良くなれるかっていうとやっぱりまあ、色々場面が違いますね。

(HK) Tamen al mi ŝajnas, ke la specialeco de Esperanto estas, ke ni povas tuj interkonatiĝi bone, se ni parolas Esperanton. La situacio similas al fumantoj. Ili interkonatiĝas tre facile en la loko, kie oni rajtas fumi.

(エスペラントが特別なところは、エス

ペランチスト同士なら簡単にうちとけるところですね。喫煙者が喫煙所ですぐにうちとけるようなもので)

(TS) Jes!

(そうです)

(HK) Ĉu ne?

(そうでしょう)

(BM) Ĉar ili estas kaptitaj en iu skatolo, same kiel esperantistoj estas kaptitaj en la sama loko dum la kongreso, kie homoj el pli ol ducent landoj venas kaj parolas la saman lingvon. Oni ne sentas lingvan barilon.

(喫煙者が箱の中に入れられるように、エスペランチストも大会のときには200以上の国から人が集まる場所にとじこめられる。でも、言語の壁は感じないですね)

(TS) Mi partoprenis en UK en Jokohamo, kaj renkontis italon en la skatolo por fumantoj. Li demandis al mi pri mia profesio kaj mi respondis, ke mi instruas ĉe universitatoj. Lia malespero estis granda. Li diris, "Ho, ankaŭ vi! Mi trovas nenium laboriston ĉi tie. Mi estas konstruisto. Mi volis paroli kun laboristoj de diversaj landoj sed mi nur renkontis instruistojn kaj oficistojn. Mi estas sola. Kie estas laboristoj?" Mi povus diri, ke instruistoj estas laboristoj, sed mi ne diris tiel. Tio estas interesa ĉar normale - almenaŭ en Japanio - ni facile trovas laboristojn en fumejo. Jes, mi trovis lin kiel kutime, sed ne li. Ĉiuokaze, mi ĝojas, ke mi havas ŝancon paroleti kun diversaj homoj en fumejo.

(横浜で開催されたエスペラント世界大会に参加したんだけど、喫煙者用の箱の中でイタリア人にあつたよ。仕事は何かときかれて、大学で教えていると言ったら、とても残念そうだった。「あんたもか。ここに労働者はいないのか。俺は建設業だ。世界の労働者と語り合いたいのに、教師と事務員しかいない。俺は孤独だ。労働者はどこだ」と言っていた。教師も労働者だと言ってもよかったけど、そうは言わなかった。面白いのは、少なくとも日本では、喫煙所にいけば労働者に会えるということだね。実際いつものように、彼のような労働者に会えたんだから。だけど彼にとっ

*1 世界大会とは、世界のどこかで毎年開催されているエスペラントの大会のこと。1905年にフランスで第1回大会が開催され、2017年には韓国のソウルで第102回大会が開催された。国際青年大会は、世界大会の後で開催される若者中心の大会。2017年はトーゴのアネホで第73回大会が開催された。またマクは2000年に香港で第51回大会を主催した。

てはそうではなかった。いずれにせよ、喫煙所に行けばいろんな人とお喋りできるのは楽しいよ)

(HK) Do, kiel pri la angla lingvo? Al mi ŝajnas ke nun tro da homoj parolas la anglan, kaj paroli la anglan estas tute normala afero. (英語はどうですか。これだけたくさんの人が話すと、話せるのが普通のような気がしますけど)

(NB) まあ、英語を喋ってくれる人に会ってもコミュニケーションの上では便利だけど、何も別にうれしくはないですね。英語話者だから当然と思う人もいっぱいいるんでしょうけど、そうじゃない人は、白人でも何人でもなんでも英語で当然話しかけられて、それはやっぱりどうかと思うんです。気持ち的には。

(BM) If they speak in the same accent as you do, do you feel closer?

(もしも同じ「なまり」で話してきたら、親近感がありませんか)

(NB) Sure!

(もちろん)

(BM) I always feel that there is a hierarchy of respectability of English accents.

(英語といっても「なまり」による階層差があると思うんです)

(HK) Akĉento ja estas problemo. Estas facile juĝi homojn per tuj rimarkeblaj trajtoj kiel prononcado aŭ koloro de haŭto.

(「なまり」は問題ですよ。肌の色もそうですけど、発音みたいになさるような特徴で判断されがちですから)

(NB) Unfortunately so. I talk about global Englishes to my students. What is “standard” English? British, BBC or CNN or, ... and how do you call Englishes. How are they used?

(残念ながら階層はあるね。学生には「グローバル英語」について話すんだけど、何が「標準」なのか、イギリス英語なのか、BBCとかCNNとかの英語なのか、そもそも「英語」とよんでいいのか、どのように使用されるのか、などなど)

(HK) Rilate al tio, japanaj universitatoj, inkluzive la universitaton de Kioto, ofte varbas instruistojn de la angla lingvo, sed la plej grava kondiĉo estas, ke kandidatoj devas esti denaskaj parolantoj de la angla. Tiam, tamen, denaskoj el kiaj klasoj, kaj kiaj anglaj lingvoj estas akceptataj?

(これについて言えば、京都大学をはじめとして日本の大学ではよく英語教師が募集されて、母語話者でないとダメとかいいますが、どんな階層出身のどんな英語の母語話者ならいいんですかね)

(NB) English for communication is mostly among non-native speakers. And so there was a kind of a hierarchy within global Englishes, the Anglophone core expects and still has some sort of legitimacy, and then another tier which is composed of global Englishes, with native speakers of Singaporean English, Indian English and so many others. These speakers grow up speaking their own English natively. I think that the time will come for those Englishes to be more recognized.

(コミュニケーションの英語は非母語話者のものだよ。ただ「グローバル英語」といっても階層がある。英語圏の中でも中核的な英語にまだ権威がある一方で、シンガポール英語とかインド英語のようなさまざまな「グローバル英語」も台頭している。そういう人たちは母語のように自分たちの英語を話している。そうした「英語」が認知される時代もすぐに来ると思いますよ)

(BM) You really think so?

(本当にそう思いますか)

(NB) I mean there are forces pulling away from standardization with technology, globalization and localization happening at the same time. So while I do think the power of the Anglo-standards is quite strong, I think more diversification and divergence than we realize is also happening. Maybe one way to look at it is, what types of English do people really use when they communicate in different situations? Rather than looking at whatever textbook the teacher gives you, and then comparing against that.

(標準化から引き離す力が働いていると思う。技術の進歩とグローバル化とローカル化が同時進行していて、アングロサクソン中心主義の力が強大ではあるけど、一方で僕たちが思っている以上に多様化と分裂も発生していると思う。色々な場面で実際にどんな英語を使っているかを調べてみるほうが、どんな教科書を使っているかを比較してみるよりも、何かわかるかもしれない)

(BM) I would suspect that the so-called globalization is really just Americanization, right? If you want to speak respectable English, you should conform to this particular variety of English as it is advocated in mass media and movies and...

(いわゆるグローバル化といっても、実際にはアメリカ化ですよ。それなりの英語を話したいなら、マスメディアや映画でみられるように、英語の特定の変種を使わないといけませんね)

(NB) But I think that has a lot to do with the position of the Anglophone core in the world, right? It can change gradually.

(そうなんですけど、世界における中核的英語圏の地位と関連していて、これから変わっていくんじゃないかな)

(HK) Mi elkore esperas, ke la situacio tiel ŝanĝiĝu, kiel oni ne plu postulas tiel nomatan “nativecheck” (la esprimo estas ofte uzata en la japaneca-angla lingvo. La signifo de la vorto estas “revizio de lingvo far de denaskaj parolantoj”) al akademiaj monografioj. Lingvistoj ofte substrekas la gravecon de lingva diverseco, kaj tiel fanfaronante gajnas monon por esplorado. Malgraŭe, ili ne respektas la diversecon de lingvoj uzataj en monografioj. Ili ofte adoras studojn skribitajn en la angla kaj ignoras aliajn. Tiaj sintenoj ankaŭ devas ŝanĝiĝi.



ラオスで漢字と併記されるラオ文字。縦書きになっているのが珍しい (NB)。

(本当に変わってほしいですね。そして、いわゆる「ネイティブ・チェック」なんてものが学術論文に要求されない世の中になってほしい。言語学者は言語の多様性が大切だといって研究費をとってくる一方で、成果は英語でかかれたものをありがたがって他のは無視したりしますけど、そういう態度もあらたまってほしい)

リンガ・フランカ

(NB) I know people who are very concerned about speaking the right English, pressured as you said?

(「正しい」英語を話さないといけないうという強迫観念をもってる人がいるよね)

(HK) Jes, estas ofte dirite, ke japanoj ne parolas la anglan ĉar ili pensas, ke estas devige paroli la ĝustan anglan lingvon, kaj samtempe timas erarojn kaj gramatikajn kaj prononcajn. Aliflanke, baratanoj tute ne ŝajnas prizorgi pri tiaj aferoj, ŝajnas eĉ fieri, ke la angla de ili mem estas ĝusta.

(日本人は「正しい」英語を話さないといけないうとおもっているし、文法や発音を間違えるのもこわいので、結局英語を話さないなどといわれたりしますね。一方でインド人なんかはそんなこと気にしないどころか、自分たちの英語こそが正しいと誇りにしているようにさえ見えますね)

(NB) But what if that pressure changes? The Singaporean attitude towards English is quite interesting, right? Always back and forth English, Singlish, ... Local identity versus global acceptability. And it's not just a question of English, is it? Cantonese in Guangzhou, for example.

(だけどもしそんな強迫観念がかわるならどうだろう。たとえばシンガポールでの英語なんかは、「英語」と「シンガポール英語」をいったりきたりしている。シンガポール人としての誇りと、グローバル化する世界でいかに受け入れられるかという葛藤がある。これは英語だけの問題じゃないよね。たとえば広州での広東語も)

(BM) Yes, Cantonese, I think it's facing precisely that kind of challenge now. You probably have heard about the controversy at the moment in Hong Kong. A rather controversial movie came out recently, that in ten years

people will be discriminated against speaking Cantonese, their mother tongue, in Hong Kong.

(そう、広東語。香港でとても問題になっているのは聞いたことがあるでしょう。最近物議をかもし映画がでました。この十年のうちに香港で母語である広東語をはなすと迫害されるという内容です)

I can feel that languages are closely tied to people's identities, values and self worth. Kompreneble, neŭtrala lingvo kiel Esperanto povus iel helpi. Ĉar multaj malgrandaj lingvoj rapidege malaperas pro tiu fenomeno de nacia lingvo, ĉu en Hindio, ĉu en Ĉinio kaj ankaŭ ĉiuj aliaj landoj...

(でも言語はアイデンティティーや価値観と深く結びついているので。だからエスペラントのような中立な言語がー役買うかと思うんです。インドや中国や、世界中の国々で国家語のせいで少数民族語がどんどん消えていってまますから)

(HK) Bangladeŝo montras interesan ekzemplon en tiu punkto. Simple dirite, Bangladeŝo sendependiĝis pro la bengala lingvo. Dum la sendependiĝa milito, kontraŭ pakistanoj, kiuj devigis la urduan lingvon al bengaloj, kaj islamanoj kaj hinduoj kunkontraŭbatalis ĉar ili komune parolas la bengalan. Tamen, post la sendependiĝo, bengaloj ekdevigis la bengalan eĉ al nacimultoj, kies denaskaj lingvoj ne estas la bengala.

(バングラデシュの事例は面白いとおもいます。簡単にいえば、バングラデシュが独立したのはベンガル語のおかげでした。独立戦争の間、ウルドゥー語を強制するパキスタン人に対して、イスラム教徒もヒンドゥー教徒もベンガル語を話すベンガル人ということで共闘したわけです。だけど独立したあとは、今度はベンガル語を母語とするわけでもない少数民族にもベンガル語を強制したのですよ) Do, kia estas en Papua Nov-Gvineo, ĉu ili estas rapide malaperantaj?

(パプアニューギニアはどうですか。少数民族語がどんどん消えてますか)

(TS) Jes, onidire jes. Sed ne la Dom lingvo, kiun mi ĉefe studas. Ekzistas multaj lingvoj sanaj. Ekzistas pli ol ok cent lingvoj parolataj en Papuo Nov-Gvineo kun diverseco.

(うん、みんなそういうけど。でも、私がやってるドム語はまだまだ元気だし、



パプアニューギニア、銀行の中の三言語による貼り紙(禁止事項)(TS)。

元気な言語はほかにもたくさんあるよ。パプアニューギニアには800を超える言語があって、それぞれに多様性がある)(BM) Ĉu multaj ankaŭ lernas la anglan?

(英語を勉強する人も多いいんですか)

(TS) Jes, ĉar la angla estas unu el tri oficialaj lingvoj. Tokpisino, Hiri Motu, kaj la angla.

(うん、英語は三つある公用語の一つだから。トクピシン、ヒリモトゥ語、そして英語)

(BM) Tokpisino estas kvazaŭ komuna lingvo, ĉu ne?

(トクピシンが共通語のようなものじゃないんですか)

(TS) Jes, plej multe eble la duono de Papuanovgvineanoj parolas la tokpisonon, sed multaj ne parolas ankaŭ. Tok Pisin estas forta en la norda parto de Papuo-Novgvineo, kiu iam estis koloniigita de Germanio, sed ĝi ne estas tiom populara en la suda parto. Do, multaj indigenoj de Port Moresby, la ĉefurbo de Papuo-Novgvineo, kiu situas en la suda parto, ne parolas Tok Pisin. Kompreneble, en nuntempa Port Moresby, Tok Pisin estas unu el la plej ofte uzataj lingvoj ĉar multaj fremduloj enmigris el diversaj partoj de PNG. (そうだねえ、たぶんパプアニューギニア(PNG)の半分くらいの人トクピシンを話すけど、話さない人もたくさんいるし。トクピシンは、かつてドイツが植民地にしてたPNG北部では強くて、南部ではそれほどではない。だから南部にある首都のポートモレスビーだと、地元民はトクピシンを話さない。もちろん、PNGのいろんな地方から人が来ているから、今ではポートモレスビーでもトクピシンがよく使われてはいるんだけど)

(BM) Kiu estas la komuna lingvo tiuokaze, ĉu la angla tio fariĝas?

(そういう時、何語が共通語になりますか、英語?)

(TS) La angla ja estas uzata ĉefe



濟州島、大型スーパーの入口の多言語案内
(ハングルの「ようこそ」は濟州方言) (TS)。

de edukitaj urbanoj, sed ekzistas multaj lokaj komunlingvoj. En Port Moresby, indigenoj parolas inter ili Hiri Motu, piĝiniĝinta variaĵo de la lingvo Motu. En la provinco Simbu multaj homoj parolas la Kuman-an lingvon, kiu estas la loka komunlingvo en Simbu, krom iliaj denaskaj lingvoj. Flueco de Kuman rilatas al loka aŭtoritato ĉar gvidantoj devas paroli la lingvon ĉe kunsido de diversaj etnoj. Multe el ili parolas ankaŭ lingvon de iliaj patrinoj, kiuj devenas de diversaj regionoj. Parolantoj de Dom kutime parolas la lingvon de iliaj patroj – Dom – kun iliaj patrinoj, sed ili spertas sufiĉe oftajn kaj longajn vizitojn al hejmlandoj de iliaj patrinoj, tiel ke ili bone posedas lingvon de patrino. Do, fakte, iu ajn lingvo povas esti komunlingvo por iuj. Ankaŭ mi ofte uzas Dom por komunikiĝi kun alilingvanoj – viroj kaj virinoj – en Papuo-Novgvineo. Eĉ kun usonaj misiistoj laborantaj en Dom mi uzas Dom kaj Tokpisinon. Kaj dank'al internacieco de Tokpisino, mi povas paroli kun vanuatanoj kaj solomonanoj en Tokpisino ĉar ili parolas fratinajn komunlingvojn: Bislama kaj solomonan piĝinon. Tiuj ĉi lingvoj estas interkompreneblaj. Mi nur zorgas miksi iom da vanuatuj kaj solomonaj elementoj por la egaleco ĉar Tokpisino estas pli forta lingvo en Melanezio. (都市部の教育を受けた人たちには英語も使われるけど、地域ごとにたくさんの共通語があるんだよ。ポートモレスビーでは、モトゥ語という言葉が共通語化したヒリモトゥ語という言葉が地元民同士は使っている。シンブー地方

では、それぞれの母語とは別に、クマン語という現地の共通語を使っている。指導者は各民族が集まる会合ではクマン語を話す必要があるの、クマン語が流暢かどうかが威信にかかわる。加えて、大抵はみんな母親の言語も話す。母親はいろんな地域から嫁いできている。たとえば父親の言語がドム語だとしても、それとは別に母親の言語も話す。なぜなら、母親の実家にもよく行って生活しているので。だからどんな言語であっても、誰かとの共通語たり得る。私も、ドム人ではないドム語話者と男女問わずドム語で会話することがPNGではよくある。ドムの村にいるアメリカ人宣教師とさえドム語やトクピシンで話す。さらにトクピシンには国際性もあって、バヌアツとかソロモン諸島の人たちともトクピシンで話したりする。彼らが話すのは、トクピシンとは近縁のビスラマ語とかソロモンピジンなので通じる。メラネシアではトクピシンの方が強い言語なので、バヌアツやソロモン的な要素を混ぜて話すように心がけてはいるけど) (BM) Sed temas pri televido aŭ radio, kiu estas la ĉefa lingvo tiuokaze? (ではテレビやラジオでの共通語はどうなってますか) (TS) Tri lingvoj: la angla, Tokpisino, kaj Hiri Motu. (三言語だよ。英語、トクピシン、ヒリモトゥ語) (BM) Samtempe? (同時に?) (TS) Jes, sed la angla estas la plej ŝatata en televido kaj radio. Temas pri la diverseco de lingvoj. (うん、まあテレビやラジオでは英語が一番好まれてはいるけど、言語は多様だよ) (NB) That's interesting concept because the idea of lingua franca will be often connected to one language. And now that one language happens to be English, right? (それは面白いね。リンガ・フランカ^{*2}というのは普通は何か一言語が共通語になるということで、たとえば今はたまたま英語がそうなっているだけで) But in reality in Papua New Guinea, also in South East Asia, people usually use several common languages as *linguae francae*. They overlap with each

other and are quite dynamic, sometimes involving the national language sometimes not, and showing different variation on local social hierarchy. So we need to think of what the idea of lingua franca really means. I always challenge students to think of many Englishes, and the possibility that "one lingua franca" is not the future of the world. (だけど実際には、パプアニューギニアとか東南アジアとかでは、共通語が何種類もあって、時と場合によってみんな自在に使い分けているんだよね。だからリンガ・フランカというのは一体何なのかを考える必要がある。英語と言ってもいろんな英語があるんだと学生には言ってるよ。リンガ・フランカが一つだけなんていうのは、世界の未来の姿ではないという可能性も考えるようにも言ってる) (TS) Unu merito de Esperanto. Ĝi kontribuas al la diverseco de komunlingvoj. (エスペラントの利点は共通語の多様化にもあるよね) (HK) Estas certe, ke kiam esperantistoj geedziĝas, iliaj gefiloj ofte ankaŭ komprenas kaj Esperanton kaj denaskajn lingvojn de gepatroj. Do, bone fartas lingva diverseco. Aliflanke, tamen, en la kazo de nacimultoj en Bangladeŝo aŭ Birmo, kie mi esploras, kiam homoj ne scias denaskajn lingvojn de siaj geedzoj, ŝtata lingvo kiel la bengala aŭ la birma fariĝas la hejma lingvo, kaj sekve iliaj gefiloj ne plu povas mastri denaskajn lingvojn de siaj gepatroj. Pro amo perdiĝas lingvoj, bedaŭrinde. Al mi ŝajnas, ke nur per Esperanto oni ne kapablas travivi la vivon, kaj pro tio mastras aliajn lingvojn. Kontraŭe, estas preskaŭ ne eble travivi sen aŭ la bengala aŭ la birma en tiuj landoj, kaj ne restas merito lerni aliajn lingvojn. La fundamenta karaktero de lingvo ŝajnas esti tio, sen kio oni ne eblas vivi. (たしかにエスペランチスト同士が結婚すると、こどもはエスペラントを母語にしつつも、両親の母語も身につけたりする。だから言語多様性がしっかりとある。だけど、私が研究しているバ

*2 共通語のこと。十字軍の時代にフランク王国を中心に結成された軍隊の中で発生した共通語を「フランクの (franca・フランカ) 言語 (lingua・リンガ)」と呼んだことに由来するという説もある。

ングラデシュやビルマの少数民族のばあい、言語がちがう民族同士が結婚するとベンガル語とかビルマ語といった国家語が家庭の言語になってしまって、両親の言語が継承されなかったりしますね。愛ゆえに言語が減びるといって、悲しいことになってます。エスペラントだけでは生きていけないから他の言語も身につけるけど、ベンガル語やビルマ語は、むしろそれを知らないで生きていけないし、他の言語まで習得するゆとりがなかなかないのでしょね。言語は、それを知らないで生きていけないというのが、基本的な特徴かもしれない)

言語と思考

(BM) Jes, precipe interese ankaŭ estas kiam oni pensas pri iu lingvo, samtempe oni havas aliajn asociatajn ideojn, ĉu ne?
(特に面白いのは、何について話すかによって言語が違うことですね)
(HK) Ĉu? Kvankam mi fojfoje uzas kelkajn lingvojn, mi ĉiam pensas nur japanece, kaj iel esprimas en aliaj lingvoj kun limigitaj vortoj. Laŭ miaj amikoj, mi ĉiam elbuŝas en la sama maniero en ĉiuj lingvoj.
(そうですね。私なんか他言語をつかうこともありますけど、日本語的にしか考えないですし、限られた語彙で何とかかしてますね。何語を話すときもおなじように聞こえるといわれます)
(BM) Por mi, la angla estas akademia lingvo kaj pro tio mi uzas ĉiam iomete pli longajn malfacilajn vortojn ol normalaj anglaj parolantoj, ĉar mi tiel lernis la anglan. Kompreneble mi ĉiam pensas en mia denaska lingvo pli vulgare, tio estas, la kantona.
(私にとっては、英語は学術言語なので、いつもちょっと長めの難しい単語を使ってしまおう。そうやって英語を学んだものですから。そして日常的なことは広東語で考えます)
(HK) Depende je lingvoj, vortoprovizoj ŝanĝiĝas kompreneble.
(言語によって知ってる単語がかわるのはわかりますね)
(BM) Esperanto estas por mi tre interesa ĉar kvankam ĝi estas artefarita, mi pensas ke estas

foje ideoj, kiujn mi pensas en Esperanto, sed ne ekzistas en aliaj lingvoj.
(エスペラントは面白くて、人工言語なんだけど、他の言語ではないようなことまでエスペラントで考えたりしますね)
(HK) Ĉu, ekzemple?
(たとえば)
(BM) Ekzemple, dum pensado, Esperanto estas pli libera ĉar fojfoje en denaska lingvo kelkaj konceptoj mankas. Ekzemple, fingroj,...
(たとえば、何か考える時、エスペラントは自由なんですよ。母語だと他の言語ではないような概念があるので。たとえば指とか)
(TS) Fingroj!
(指だね!)
(BM) Kiom da fingroj vi havas, ekzemple?
(たとえば、指は何本ですか?)
(HK) En kiu lingvo?
(何語で?)
(BM) Depende je la lingvo, la ideo ekzemple de du-dek fingroj povus esti tre stranga en kelkaj lingvoj, sed ne en la japana, la hispana, aŭ Esperanto. Krome en Esperanto oni povas krei novajn vortojn, kunmetitajn vortojn kaj tiel plu.
(何語であるかによるけど、指が20本あるというのは日本語とかスペイン語、エスペラントでは自然だけど、とても不自然に思える言語もあるわけですよ。さらにエスペラントなら、いくらでも単語を自由に組み合わせさせて新語をつくれるわけで)
(HK) Temas pri fingroj, mi aŭdis, ke en la angla ekzistas nur ok fingroj. Ĉu vere?
(指について言えば、英語では8本しかないと聞きましたけど、本当ですか^{*)})
(NB) Thumbs, there is no word, no?
(エスペラントだと親指に特別な言い方はないんですか)
(TS) Du grandaj fingroj?
(二本の大きい指かなあ)
(BM) Jes, certe ekzistas, fingroj parencaj, sed kiam mi parolas la anglan, how many fingers do you have? Ten? Eight?
(きつと何かあるはずだけど、両親の指

とか、だけど英語では何本ですか。10本ですか。8本ですか)
(NB) Yes, you only have eight fingers. So when you say "How many fingers?" and you are laughing because you are thinking "yubi", and I was thinking "fingers". There was a nice cultural mismatch, right?
(確かに英語では8本だけだね。「指が何本ありますか」という時、笑ってしまうのは、みんなは「指」のことを考えているのに、自分は「finger」を考えているからだよね。文化の違いがよく現れているよね)

言語の魅力

(HK) Antaŭ pli ol 20 jaroj, en iu prelego de profesoro Tanaka Kacuhiko, li diris, ke "Kial Esperanto ne disvastiĝas multe", kaj lia respondo estis, ke "Ĉar uzantoj de Esperanto ne estas allogaj".
(20年以上前ですけど田中克彦教授が講演会で「どうしてエスペラントははやらないのか」と言って、そして「エスペラントの使用者が魅力的ではないからだ」と答えてましたね^{*)})
(BM) En kia senco? Belaj? Ekzemple...
(どういう意味で。たとえば、美しいとか(笑))
(HK) Belaj, allogaj, aŭ tre interesaj, tiam aliaj neesperantistoj ankaŭ eklernos Esperanton.
(美しいとか、魅力的とか、面白いとか、そうしたら他の人たちもエスペラントを学び始めるだろう、と)
(BM) Jes, li pravas.
(田中克彦は正しいですね)
(HK) "Do bonvole vi fariĝu tre bela aŭ alloga aŭ interesa". Li proponis al esperantistoj.
(「ですから、どうぞみなさん美しく、魅力的で面白い人になってください」と田中克彦は提案したんですよ)
(BM) Tio estas interesa fenomeno. Because there is a certain linguistic charm associated with each language. It influences why people want to learn a particular language in the first place. Languages like Arabic are important, but hard to master. But the interest in learning a language

*3 日本語で「指」といえば、手足をあわせて20本ある。しかし英語で「finger」といえば、手の指だけであり、しかも親指は含まれないので8本となる。

*4 田中克彦(1934-)。一橋大学名誉教授。社会言語学者。著書に『ことばと国家』(岩波新書、1981年)、『エスペラント—異端の言語』(岩波新書、2007年)など。1994年10月の日本エスペラント大会での発言。

is not always related to the practical world, but to the fantasy associated with the culture and the language. Look, there are people who bothered learning Klingon or Elvish.

(これは面白いですね。というのは、言語の魅力と関係しているから。そもそもどうして人は言語を学ぶのか。アラビア語のような言語は重要だけど、習得は難しい。言語を学ぶのは実社会での利益のためばかりではないですよ。ほら、クリンゴン語^{*5}とかエルフ語^{*6}とか、空想世界の文化や言語そのものに惹かれて学ぶこともある)

(NB) Elvish, or Dothraki.

(エルフ語とかドスラキ語^{*7}だね)

(BM) "Game of Thrones," yes.

Why would someone want to learn a language that would not be useful? I think language for people is like a game as well. But I suppose if you learn a language like Klingon, you would want to communicate with other Klingon speakers. Tiasence ankaŭ multaj homoj lernis Esperanton, por kuniĝi al aliaj homoj. Ekzemple en la okdekaj jaroj en Ĉinio, kiam la lando estis apenaŭ malfermita, pli ol miliono da ĉinoj lernis Esperanton per koresponda servo, esperante ke ili trovos leteramikojn. Tiam la angla estis kvazaŭ la lingvo de la malamikoj, ĉu ne? Kaj pro tio, Esperanto helpis homojn trovi aŭ fari novajn ligojn kun eksterlandanoj.

(『ゲーム・オブ・スローンズ』ですね。どうして実用的ではない言語を学ぼうとするのか。言語というのはゲームのようなものだと思う。もしもクリンゴン語を学べば、他のクリンゴン語話者と交流したくなるでしょう。この意味で、エスペラントをたくさんの人が学んでいて、人々につながっている。たとえば1980年代の中国はやっと開かれてきたところで、百万人単位の中国人がエスペラントを学び、海外と文通したりしてました。当時は英語はほとんど敵性言語でしたから。だからエスペラントは海外との架け橋として役立ったのです)

(HK) Alie, en lasta somero en

Japanio aperis videoludo, en kiu Esperanto ludas ĉefrolon. Nome, oni ne povas antaŭen iri sen lernado de Esperanto dum ludado. La ludo tuj gajnis grandan famon. Pro tio, eĉ lernolibroj de Esperanto ekvendiĝis multe. Troviĝas homoj, kiuj lernas eĉ Esperanton nur pro la ludo.

(そういえば、日本でこの夏にエスペラントが主に使われていて、エスペラントを知らないと先に進めないようなゲーム^{*8}が発売されて、すぐに話題になって、エスペラントの教科書が急に売れはじめたりしました。そのゲームで遊ぶためだけにエスペラントを勉強する人もいるのですね)

言語の規範と論理

(NB) I appreciate that specific culture has specific linguistic terms that are very particular to every culture, right? But I wonder if there is just a question of efficiency. You know, if you are going to say "mottainai". It doesn't mean you cannot say it in English. You can communicate the sentiment. It just takes more time. And maybe you won't get the same connection immediately, but that's culture. It's okay. I was thinking when I was looking at the materials of Esperanto and stressing how it's very simple but how it's also very predictable, it's basically a sort of tools and you can combine any parts for constructing. You use them to create something. It's free. I haven't learned them all, but I can imagine them. And I'm thinking about how we normally learn and use language, which is completely opposite.

(それぞれの文化がそれぞれの文化に根ざした表現をするというのがいいと思うね。だけど、伝達の効率というものも考えてしまう。たとえば「もったいない」といえば、英語に翻訳できないわけではないけど、ちょっと説明的になって長くなる。そうすると直接的なつながりはなくなるよね。でも、それが文化というものだから。エスペラン



ビルマでカドゥー人の村にあったビルマ文字とカドゥー文字による看板。カドゥー文字は近年つくりだされた(HK)。

トの教材をみていて思ったのは、エスペラントがいかに簡単であって、語彙を組み合わせて自由に表現できるかということ。全部をちゃんと学んだわけではないけど、想像はつきます。だけど僕たちが言葉を学んで使う時は、むしろ逆で、簡単さとか効率とかは考えられないような気がするんだよね)

(BM) Yes.

(そうですね)

(NB) "You cannot say this", "This is incorrect", grammar is always telling us what is wrong.

(「こうは言わない」とか「これは間違い」とか、文法といえば間違いばかり指摘してくる)

(BM) Prescriptive.

(規範的ですね)

(NB) Yeah, Prescriptive. Language which is always corrected. That is very different mindset about, you know, how you interact with the language. For me, learning language is always about spoken language, never written languages.

(そう、規範的。言語は間違いを指摘されつづけるものなんだよ。言葉とどう向き合っていくかという考え方が、とても違う。僕にとっては、言葉を学ぶというのはいつも話し言葉であって、書き言葉ではないから)

All my first languages were spoken languages. You know, on the streets, only with sound, right? So, you learn one word, you learn three words, five words, then it becomes a game or a dream, how many ways you can put things together, to say something.

(僕たちが学ぶ第一言語というのは音声言語なんだよ。何か単語をきいて、そ

*5 クリンゴン語はアメリカのテレビドラマ『スタートレック』の中で使用される人工言語。

*6 エルフ語とは、J. R. R. トールキン (1892-1973) による小説『指輪物語』の中で登場する言語。言語学者でもあったトールキンが作中でエルフが話す言語として自作した。

*7 ドスラキ語はアメリカのテレビドラマ『ゲーム・オブ・スローンズ』の中で使用される人工言語。

*8 2017年8月に発売された「ことのはアムリャート」という、いわゆる「百合」(美少女同士が恋愛する)系のゲーム。

れが二つ三つと増えていって、ゲームや夢みたいに、何かを言うのにいくつまで組み合わせられるかを考えてみたりする)

But when we learn language in school, it's the other way. I think a lot of people have this baggage in learning English, the baggage consists of mistakes from the grammatically incorrect part of it. (だけど学校で言葉を学ぶ時は逆だよ。みんな英語を学ぶために色々つめこんむんだけど、その中身は文法的に間違いだとか何とかいうものばかりで)

(BM) There are many factors which contribute to the success of learning a new language. In someway, Esperanto offers an alternative, because it's telling you that here are the basic rules, but there is no prescriptive, normative language.

(新しい言葉をうまく習得する秘訣はいろいろとあります。エスペラントも一つの選択肢ですね。なぜなら、エスペラントには一定の規則しかなくて、規範的な言い方はないので)

(NB) That is grammatical, that is ungrammatical, like this?

(これは文法的、これは非文法的、というのがある?)

(HK) Kompreneble ekzistas diversaj gramatikaĵoj en Esperanto, eĉ troveblas gramatika libreĝo kun pli ol 700 paĝoj. Tamen, la plej gravaj reguloj estas priskribitaj de Zamenhof en tiel nomata 16 reguloj. Oni rajtas uzi ajnan esprimon se tio ne kontraŭas al la reguloj de Zamenhof.

(もちろんエスペラントにも文法的なことは色々あるし、700頁をこえる文法書までありますよ。だけど根幹にあたる文法はザメンホフがさだめたいわゆる十六箇条文法です。それに反しないかぎり、何をどう表現してもいいですよ)

(BM) In the case of Bahasa Indonesia, I was told that it is the easiest language. But when you get into verbs, it looks at least to me really difficult and arbitrary. One thing about Esperanto, which

is really interesting, is the logic that it itself tries to promote. You can create new words and other will understand them as long as they are logical or imaginable.

(たとえばインドネシア語なんかは最も簡単な言語だと聞かされましたけど、動詞を勉強すると、少なくとも私にはとてもそうは思えない。エスペラントで面白いのは、論理を尊重しようとしているところですね。新しい単語をどんどん作っても、論理的であるか想定しやすければ他の人にも理解可能なんです)

(HK) Jes, estas grave, ke ni ĉiam estimu logikon de la lingvo, ne intuicion de denaskaj parolantoj.

(そう、母語話者の直感というようなものではなくて、論理をいつも尊重するということが重要ですね)

(BM) Se oni analize rompus vorton kiel manĝbastonetoj, tiu povus ankaŭ fariĝi problemo. Ĉar en ĉiuj lingvoj, ĉiuj kulturoj, kies homoj uzas manĝbastonetojn, oni uzas pli facilajn vortojn, ĉu "ohasi", ĉu "faai³zi²" aŭ iu ajn. Kvankam logika, manĝ-baston-et-o estas tre longa. Do kompreneble ĝi estas logika, sed ĝi ne estas facila. Kaj pro tio eĉ en Esperanto estas tiuj du kampoj. Unu estas tiu de la tiel nomata bona lingvo. La bona lingvo estas, tiu per kiu oni povas pensi logike kaj fari longajn vortojn logike. Kaj la alia estas naturalismo, kiun la plej multo de homoj uzas, ofte laŭ la kutimoj de la naturaj lingvoj.

(たとえば「箸」みたいな単語は分解して、「食べる・棒・小さい・名詞」みたいにします。でも、それはそれで問題にはなる。なぜなら、どんな言語でも、どんな文化でも、「箸」を使うところでは、専用の短い単語をつかうので。「お箸」だったり「faai³zi²」^{*9}だったり。いくら論理的とはいっても、「食べる・棒・小さい・名詞」と言うのはとても長いので、必ずしも簡単とは言えないでしょう。だからエスペラントの中にも二つの陣営があって、一方は、いわゆる「よい言語」派ですね。つまり、長くても論理的な単語を使おうという一

派。もう一方は「自然派」ですね。つまり大多数の人が使う単語を使ってしまおうという。自然言語での慣用的な言い回しをなぞることが多いですけど)

(TS) Do, "haŝioj" (笑)

(だから日本語をエスペラント化して「ハシーオイ」^{*10}とか)

(BM) Kaj la ĉinoj diras "kŭajzioj" aŭ "fajzioj". Kompreneble tiukaze la esperanta vorto "manĝbastonetoj" fariĝas la neŭtrala, en la senco, ke ĝi estas eŭropeca, nek ĉina, nek korea, nek japana.

(中国人は「クワイジーオイ」とか「ファイジーオイ」といったり。もちろん、こういう場合には、ある意味では、エスペラントの「食べる・棒・小さい・名詞」はとても中立的になりますよ。中国的でも韓国的でも日本的でもなくて、ヨーロッパ的だから)

(TS) Mi ne estas tre entuziasma al Esperanto pro ties eŭropeco, sed mi amas esperantistojn ĉar ili almenaŭ klopodas esti neŭtralaj. Mi iam referis pri gramatika eŭropeco de Esperanto ĉe UK, kaj mi konkludis, "Mi amas vin ĉiujn".

(エスペラントはヨーロッパ的なのでそんなに熱心にはなれないんだけど、エスペランチストは少なくとも中立であろうと努力はしているので好きだよ。エスペラント世界大会でエスペラント文法のヨーロッパ性について報告したことがあるんだけど^{*11}、最後には「みなさんのことが大好きです」と言っていた)

(HK) Ja, nia interparolado estas jes tre interesa, sed unu problemo estas, ke poste iu devas elskribi la enhavon.

(えーと、盛り上がってきたんだけど、問題は誰かが文字起こししないといけない)

(TS) Iu? Vi!

(誰か? あなたでしょ)

一同 (笑)

(HK) La japana, la angla, kaj Esperanto. Bonvole kunlaboru poste. Do, ĝis iam kaj ie.

(日本語、英語、エスペラント。後でご協力お願いします。ではまたいつかどこかで)

(TS) Ne plu!

(もうたくさんだよ!)

*9 「faai³zi²」は広東語で「箸」をあらわす「筷子」のこと。

*10 エスペラントでは名詞は「オ」でおわり、複数形には「イ」がつき、後ろから二音節目の母音を強く長く読むので、「箸」をエスペラント化すると「ハシーオイ」となる。

*11 この発表はのちに出版された。Tida Syuntarò. 2008. Kial multas lokaj adpozicioj en Esperanto?: Komparo kun la japana, Tok-pisino, Dom kaj aliaj lingvoj. En Ulrich Lins (red.) *Azias kontribuoj al esperantologio: Aktoj de la 30-a Esperantologia Konferenco en la 92-a Universala Kongreso de Esperanto, Jokohamo 2007*. Roterdamo: Universala Esperanto-Asocio, pp. 20-32.

海外渡航記

インディアナ大学での研究生活

武内 康則

私は、平成 27 年度京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラム (2015/10-2016/9)、および白眉プロジェクトの支援を賜り、米国インディアナ州ブルーミントン市にあるインディアナ大学中央ユーラシア学部 (Department of Central Eurasian Studies, Indiana University) で客員研究員として研究生活を送る機会を得ました。

私は、10-12 世紀に北中国で使用されていた契丹文字の研究をしており、近年は主に契丹大字と契丹小字の 2 種類の文字体系の比較による、文字の音価や語義の推定に焦点を当てています。契丹文字の解読は大きく進んだものの依然として不明な部分も多く、その文字によって記録された契丹語の姿も部分的にしか判明していません。インディアナ大学は、関連分野の二次資料が豊富にあり、また研究に集中することができる環境も整っています。とりわけ、私にとって幸運であったのは、今回私を受け入れてくださったアルタイ諸語の文献研究の分野で指導的な研究を続けておられる György Kara 教授と契丹語の諸形式について議論する機会を得たことです。契丹語の姿を明らかにするためには、文献に書かれた内容の解読を進めるだけでなく、契丹語と親縁関係にあると考えられているモンゴル諸語との比較言語学的研究も重要となっ

てきます。Kara 教授との交流により、契丹語について新たな知見を得ることができたのに加え、これまでの研究姿勢や研究方法について異なった視点から捉えることもできました。私を快く受け入れてくださった Kara 教授に感謝申し上げます。

インディアナ大学は研究機関としてだけでなく、美しいキャンパスや優れた博物館などを有しており、観光地としても多くの人々が訪れています。また、ブルーミントン市は、学生の街としても知られ、様々なイベントが開催され地域の人々との交流を進めることができる機会にも溢れています。モンロー湖を訪ねブルーミントンの豊かな自然に触れることができたのも楽しい思い出となっています。

最後に、今回の渡航を支援してくださった白眉プロジェクトおよびジョン万プログラム関係のみなさまに心よりお礼を申し上げます。 (たけうち やすのり)



György Kara 教授と (T.C. Steele State Historic Site にて)

海外渡航記

Leaving Japan to Study Japanese Cinema

Jennifer Coates

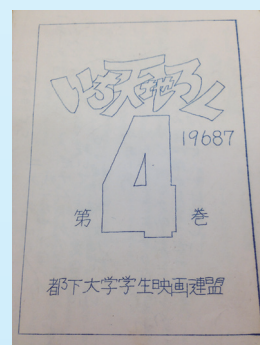
My research at the Hakubi Center is focused on post-war Japanese cinema, so it might seem strange that I do some of my research abroad. Why go overseas to study Japanese film, when Kyoto has such rich film history?

Well, some of the most useful archives of Japanese film materials end up being sent overseas. In particular, collections of 'film ephemera' – the advertisements, handbills (*chirashi*), and memorabilia produced around a particular film – are an important part of post-war Japanese film research. Yet these items can take up a lot of space, and have to be organized in innovative ways if they are to be searchable. This kind of collection requires a dedicated facility and staff, and that often means moving overseas to institutions that can afford to invest in the collection.

Whenever I travel to the USA, I try to stop in New York to visit a unique collection at the Starr East Asian Library in Columbia University. The Makino Mamoru collection houses over 80,000 items collected by the famous filmmaker and historian. Mr. Makino collected film ephemera at his home in Tokyo for over 50 years, until the huge collection was moved

to Columbia in 2008. It took eight years to complete the organization of the archive, which includes over 1,000 pre-war scenarios, over 3,000 leaflets from regional movie theatres from the 1910s through the 1940s, as well as over 5,500 post-war movie theatre programs and fliers. For my own research, I often use the hand-written magazines produced by amateur film societies in the 1950s and 1960s (*dōjinshi*).

When I arrive in New York, I sometimes think the airport officials must find it odd that I'm travelling away from Japan to study Japanese cinema. But when I arrive at the Makino Mamoru collection, I know that the special expertise of the staff and the enormous variety of the materials cannot be found anywhere else. Sometimes you have to go halfway around the world to study the culture that you experience everyday. (じよにふあー こーつ)



A hand-drawn pamphlet by the Tokyo University Students' Film Association

研究の現場から

閃きの瞬間

石本 健太

この4月からオックスフォード大学数学研究所に滞在しています。研究所の建物は、数年前に新しく建てられたもので、あちこちに数学ネタが仕込まれており、ここに集う人々の数学への愛を感じます。また、建物には、ここの教授でもあり、「フェルマーの最終定理」を解決したアンドリュー・ワイルズの名前が冠されています。先日、研究所のティールームで手に取った冊子に、ワイルズが証明を思いついた瞬間の回想が書かれていました：「何年も考え続けることで、直感が磨かれ、あるとき、答えが光のように現れるのです…この閃きの瞬間 (eureka moments) のために、数学者は生きているのです… (中略) …1994年9月のあの朝、最終定理が解けた瞬間を、生涯忘れることはないでしょう」。

数学者の端くれの私にも、些細ですが忘れられない瞬間があります。このうちの一つをお話したいと思います。ここ数年、私は「流れの中の微生物の遊泳」を表す方程式に取り組んでいます。このような複雑な現象を表す方程式は、もはや紙とペンで解けることはほとんど無く、もっぱらの目標は、式をコンピュータで解いて(コンピュータシミュレーション)、生物の理解を深めることです。しかし、この方程式の厳密な解を求めることを諦めていたわけではありません。生物学寄りの研究を進めながら、何か手がかりはないものかと、日々アンテナを張っていました。

この発端は、ある会議で聞いた理論です。その理論は、特定の条件下では非常にパワフルで、もしかすると、これを使えば、自分の方程式も手計算で解けるかもしれません。その後、発表者の先生に理論の技術的な部分を教わりながら、長い長い計算を経て、無事に方程式の一部を解くことができました。しかしまだ完全な解ではなく、コンピュータの助けが必要です。しかし、さまざまな条件でコンピュータ計算をしても、予想していた解が現れません。予想よりももっと単純なパターンばかりが出てきます。…困りました。その日は諦めてさっさと家に帰ることにしました。「見つからないのなら、そのことが証明できればよいのに」。

出町柳駅までのいつもの帰り道で、閃きの瞬間は訪れました。コンピュータの画面に現れるパターンは、まるで太陽系の星々の運動のように規則的でした。そして、この星々の規則の背景にある「数学的な構造」が、微生物の遊泳の方程式にも存在していることを確信しました。このような妙な直感が当たることは、ほとんどありませんが、この時は何かに導かれるかのように、はっきりと答えが見えていたことを覚えています。その後、帰り道から、翌朝までの記憶はありませんが、家族の証言によると、突然ベッドから飛び起きたり、ひたすら何かをつぶやいたりしていたそうです。おそらく証明の方針を考えていたのでしょう。翌朝、幸せを噛み締めるかのように、証明のための計算に取り組みました。幸いなことに、あるいは非常に残念なことに、

ものの1時間で証明は完了し、方程式の完全な解を手に入れることができました。

私の解いた方程式は、有名な問題でもなんでもなく、無数にある方程式のひとつにすぎません。しかし、複雑な生命現象のための方程式に、宇宙を統べる数学的な構造が隠れていることは、本当に驚きです。そして、その発見の瞬間に巡り会えたことは、ただただ幸運としか言いようがありません。一生分の運を使い果たしたのではないかと思うほどの恍惚感が忘れられず、あのと時の残像を追って机に向かってしまうのは、きっと私だけではないはずです。

その忘れられない瞬間の味は、函館でご馳走になったお寿司のようでした。口の中に入れたときの衝撃、そしてその後、体中に広がる幸福感と余韻。この寿司の残像を追いかけても、オックスフォードでは、あまり成果はなさそうですが。

(いしもと けんた)



オックスフォード大学数学研究所 (筆者撮影)。
入り口にある幾何学的なデザインはベンローズ・タイル。
後ろに見えるのはラドクリフ天文台。



もうひとつの忘れられない味、函館「大寿し」。

人物史に取り組む

鈴木 多聞

現在、白眉センター/法学研究科に所属し、「第二次世界大戦の終結と戦後体制の形成」というテーマで研究を行っている。

1945年8月14日、この日は日本がポツダム宣言を受諾し、戦争が終わった日である。筆者はこれまでの研究で、宮中や、陸海軍、政治家が降伏を決断する過程を分析してきた。そこで痛感したことは、戦争は開始するより終わらせることの方が難しいということであった。

現在、筆者は、首相鈴木貫太郎（海軍大将、侍従長、首相、枢密院議長）の伝記（人物叢書）の執筆に取り組んでいる。鈴木貫太郎は終戦時の首相で、このとき77歳であった。日夜の空襲やストレスで体重は5キロも落ち、耳も遠く、体力的にも限界であったという。

人物史の目的は、ある人物の生涯を理解することにより、その時々を決断をより深く理解することにある。鈴木貫太郎に関する先行研究は少なくなく、そのいくつかは10年から30年もの長い研究に基づいているようだ。

先行研究は鈴木貫太郎という人は「実に運の強い人」であったという。この「運の強い」ということをどう考えればよいのか。

たとえば、鈴木貫太郎は幼い頃、馬に踏み飛ばされそうになった。少年時代には河で溺れかけている。少尉時代には錨ごと沈み、日清戦争では銃弾をくぐり、日露戦争では一酸化炭素中毒で倒れている。侍従長時代は周知のように二・二六事件で銃弾を浴びながら一命を取り留めた。昭和戦前期に登場した15人の首相のうち7人が非業の死を遂げた中、鈴木首相は8月15日に「国民神風隊」の襲撃を受けながらも間一髪で難を逃れている（『日本内閣史録』）。

このような鈴木貫太郎の死生の「偶然性」をどう見るかは解釈の分かれるところである。史料で実証できない性質のもので、読み手の解釈にまかせるしかない。

しかしながら、当時者が「運」についてどう考えていたのかという点なら、史料からも、ある程度は実証できる。

『鈴木貫太郎自伝』を読むと、鈴木は何回も死に損なったことを回顧して「人の運命は妙なもの」といい、2度も敵前で水雷が出なかったときには「私にはそういう運命がついて回るのだ」といっている。そして首相就任に際してのラジオ放送では、「国民諸君は私の屍を踏みこえて、国運の打開に邁進されることを確信致しまして、謹んで拝受致したのであります」と言っている。

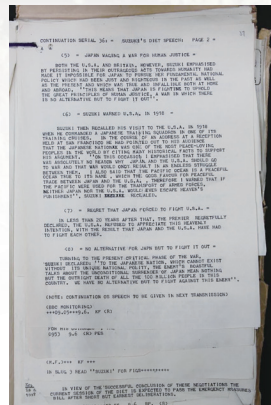
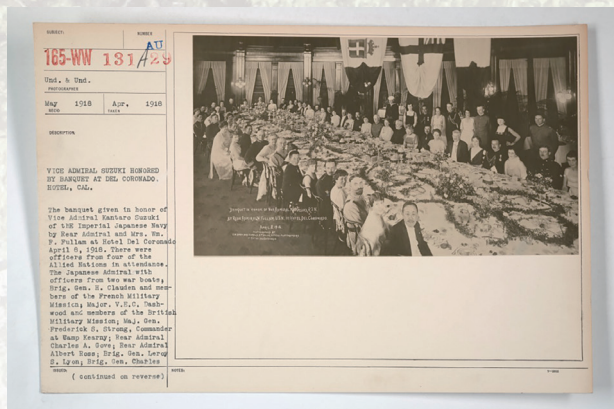
開戦の詔書は「天佑を保有し」という文言から始まり、終戦の詔書には「時運のおもむくところ」とある。一方、首相となった鈴木貫太郎は戦時議会において「(1918年の練習艦隊司令官時代、サンフランシスコでの歓迎会のスピーチにおいて)太平洋は名の如く平和の洋にして、日米交易の為に天の与えたる恩恵である、若し之を軍隊輸送の為に用うるが如きことあらば、必ずや両国共に天罰を受くべしと警告したのであります」(6月9日)、「天佑を保有するというお言葉の意味につきましては、学者の間にも非常な御議論があることとあります」(6月11日)と発言した。ところが、当時

の価値観では「天佑」を「議論」することは別の意味を持った。「御詔勅ではないか」「不敬だ」とヤジが飛び、「若し総理大臣でなくして、是だけの言葉を一般の国民が市井に於て言ったらどうなりますか」と厳しく批判された。

鈴木貫太郎は自分の生死だけでなく他人の死にも直面している。日清戦争のとき大尉であった鈴木は部下の上崎辰次郎上等兵曹をなくしている。原因は水雷の不発の責任をとっての自決であった。

鈴木貫太郎の「運命観」は何度も死線をさまよひ命拾いした経験がもとになっている可能性がある。そして、それは、無意識のレベルで、終戦時の舵取りに影響を与えたように思われる。鈴木貫太郎は「今日まで生き残ることができたというのは、これは自分の力だけではない。幸運というだけではない。もったいなくて説明ができない」「生死はその人の信念の問題である」と回想する。ある人物の「運命観」「死生観」「感謝」がどのように関連しているのかという点は、なかなか難しい問いのように思われる。

政治史の分析には①国家間レベル②国内レベル③個人レベルの3通りの分析レベルがある。現在は人物史の手法を通じて、従来合理的に説明できなかった点を少しでも解明できればと考えている。(すずき たもん)



(写真上段は1918年4月8日の写真。米国国立公文書館所蔵。日本側史料には「司令官日米親善に関する演説をなす」とある。写真下段は鈴木首相の施政方針演説の翻訳。イギリス公文書館所蔵。鈴木首相の演説内容が、当時、イギリスにも届いていたことがわかる。)

白眉研究ピックアップ

代数幾何とシンプレクティック幾何の双対性

金沢 篤

現代数学は代数、幾何、解析の3つに大きく分けることができる。私は主に代数と幾何の周辺分野を研究していて、より具体的には代数幾何とシンプレクティック幾何を専門としている。

代数幾何はデカルトによる幾何学の代数化に起源を持つ。中学校で習ったように、与えられた円と線の交点を二次式と一次式を連立させて求めることができる。このように代数幾何では代数的手法を用いて幾何学的対象を研究する。一方で、シンプレクティック幾何はハミルトンによる古典力学を幾何学的に理解する過程で生まれた。これは位置と運動量のなす相空間を抽象化した幾何学である。

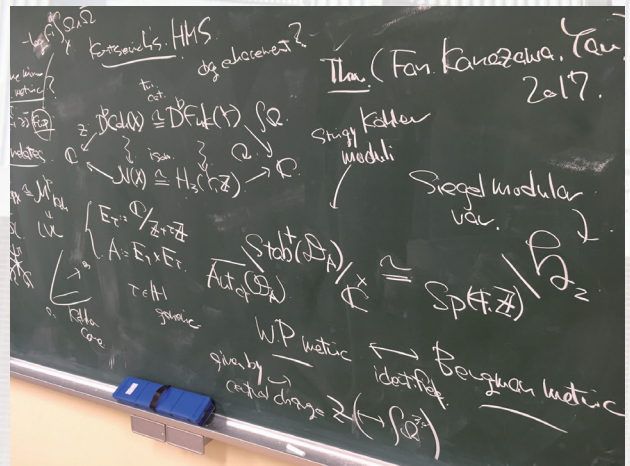
私の研究対象は代数幾何とシンプレクティック幾何の**双対性**である。フーリエ変換が双対性の典型例だが、もっと身近な物で例えるなら、だまし絵である。一つの絵なのに二つの見方ができることに不思議な面白さを覚えた人も多いと思う。私の研究に現れる双対性は、二つの見方がわかっているのに、絵が(数学的に)何なのか分かっていないという面白さがある。

2個のりんごを3セット持ってくれば6個のりんごになり、3個のりんごを2セット持ってきて6個のりんごになる。答えが同じになるのは、背後に数という抽象概念が存在し、 $2 \times 3 = 6 = 3 \times 2$ というだまし絵を見ているからである。同様に、代数幾何とシンプレクティック幾何という全く異なる幾何の間に不思議な関係が存在することは、これらを統一的に理解する新しい概念が存在するというを示唆し

ている。

実はこの双対性は**ミラー対称性**と呼ばれ、1980年代後半に超弦理論において発見されたものである。三角圏がだまし絵になるべきもので、**安定性条件**がどの方向から見るかに対応するだろうと予想して私は最近研究を進めている。フーリエ変換がそうであったように、双対性は一見異なる対象を有機的に繋げることを可能にし、幅広い応用があると期待される。

(かなざわ あつし)



数学の研究は黒板の上で進むことも多い

プラスチックを食べはじめた微生物たち

吉田 昭介

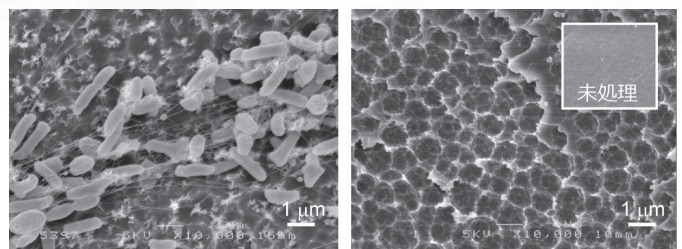
プラスチックは飲料容器やポリ袋、食品トレーなど日常生活になくはならない存在となっています。しかし、いったん使用されると「価値」を失ってごみと化し、埋め立てられたり、焼却されたり、あるいは環境へ流出したりしています。プラスチックは生ごみなどとは違い、生分解されにくく、環境に蓄積します。これにより景観が破壊され、また生物が誤飲することによる健康被害も報告されています。

今回、わたしたちは、PET分解細菌(PET:ポリエチレンテレフタレート)の略称で、ペットボトルやポリエステル衣類等に使用されているプラスチック)を廃棄ペットボトル置場から発見しました。このPET分解細菌を詳しく調べたところ、PETを段階的に分解する2つのユニークな酵素を持っていることをつきとめました。ひとつは高分子であるPETから短いユニットを切り出す加水分解酵素、そしてもう一つがこのユニットをさらに加水分解する酵素です。この細菌は2つの酵素の働きにより、PETを構成分子にまで分解し、さらにその分解産物をエネルギー源や体の構成成分としていました。(Yoshida et al., Science, 2016, vol. 351, p1196-1199)

PET分解細菌は、どのようにしてこれらの酵素を獲得したのでしょうか。PETが市場に出て70年余り、

現在までの短期間に自然界では何が起きたのでしょうか。最近になって、イモムシの腸内細菌や海洋微生物などによるほかのプラスチック分解についても報告されはじめています。プラスチックの原料は限りのある石油です。現状の、作る-使う-捨てる、の直線的な経済モデルはいずれ行き止まりが来ます。人類がプラスチックと今後どのように向き合えばよいのか、微生物が貴重なヒントをくれると期待して研究を進めています。

(よしだ しょうすけ)



PET分解細菌の電子顕微鏡画像
(左) 菌がPETフィルムにくっついて食べている。
(右) 菌を洗い流すとPETフィルムが分解されているのがよくわかる。ワイブは比較のための未処理のPETフィルム。

考古学における「資料調査」

金 宇大

9月某日、私は静岡県牧之原市の相良文化財事務所を訪れました。大ヶ谷 1-1 号横穴墓という遺跡から出土した古墳時代の飾り大刀を見せてもらうためです。

考古学には、「発掘調査」に並ぶもう一つの重要なフィールドワークがあります。「資料調査」です。過去に実施された発掘調査の成果は、「報告書」の刊行によって学界に公表されます。しかし、発掘調査報告書はあくまで遺跡に対する総合的な報告なので、個々の出土品に関してより深い分析を試みる場合、専門的な情報をさらに引き出すため、出土品を自ら観察し検討するという作業が必要となります。実際にモノに触れてみると、報告書からではわからない素材の質感や微細な製作に関わる痕跡など、様々な情報が得られます。これらの情報は至って些少な「再発見」ですが、この「資料調査」を積み重ねていくことで、次第に新しい研究視点が拓けてきます。私たちは、資料を実見するというプロセスを何よりも重視し、可能な限り遺物を観察して回るべく国内外の津々浦々を奔走しています。

大ヶ谷 1-1 号横穴墓出土の飾り大刀は、「三累環頭大刀」と呼ばれる、刀の柄頭(グリップエンド)にトランプの「クラブ」のような形状の飾りを取り付けた珍しいものです。「三累」の柄頭は、当時の朝鮮半島にあった新羅という国で象徴とされたモチーフですが、日本でも 40 例余りの類例が知られています。日本のこうした刀は、新羅との交流を示すもののなか、

あるいは日本でモチーフだけが模倣されたものなのか、その評価は古代の関係史観に関わる問題であり、慎重を要します。

銅に金メッキを施した「金銅製」の柄頭装飾は、1400 年の時を経た現在、全面に緑青が噴き出して所々剥落しています。しかし一部に残ったメッキは、当時と同じ金色の輝きを放っていました。資料調査の際はいつも心が躍ります。太古の「モノ」に直接触れる喜びは、考古学の醍醐味の一つなのです。

(きむ うだい)



「資料調査」での作業の様子

活動紹介

2016 年度年次報告会

金 宇大

去る 4 月 18 日、今年も京都大学芝蘭会館で、年に一度の白眉年次報告会が開かれました。2016 年度の報告会テーマは、「人はなぜ進化に惹かれるのか? —— 宇宙・生命・言語・思想における進化の様態比較」。「進化」をめぐる様々な学問分野の研究アプローチに触れつつ、翻って自分自身の研究の在り方を再考しようという趣旨で設定されました。

前半は、キーワードの「進化」を軸とし、テーマに示された宇宙、生命、言語、思想の各分野の白眉研究者にそれぞれの切り口で発表していただきました。演題は、宇宙鉱物学から瀧川晶助教(6期)による「宇宙における物質循環」、生態学・進化生物学から山道真人助教(5期)による「進化が絶滅に与える影響」、歴史言語学・中央アジア出土写本を研究されている荻原裕敏准教授(6期)の「時間と言葉」、圏論的対称性・数理哲学を専門とされる丸山善宏助教(6期)の「意味の進化論」。各講演では、日頃自身が取り組んでいる研究の話から次第に「進化」の概念へと論が及び、それぞれの立場から独特の理解が示されました。分野ごとの色合いの違いが鮮やかに対比され、学問の多様性を改めて実感することができました。

全白眉研究者によるポスターセッションでは、例年通り、様々な分野における最先端の研究成果が一堂に会しました。会場ではあちらこちらで分野を超えた議論が交わされ、白眉

プロジェクトならではの「学問のつぼ」とでもいうべき場が展開されました。

後半は、東京大学大学院総合文化研究科から呼び出した 2 名の先生方の招待講演です。まず、長谷川寿一教授の「日本における人間行動進化学研究の歩み」と題した講演をお聞きしました。人間行動進化学という分野がいかなる学問でどのように研究されてきたのかを非常に丁寧に整理していただき、知識の土台を固めることができました。その上で、岡ノ谷一夫教授に、生物心理学の分野から「鳴き声から言葉へ、そして心へ」という講演をうかがいました。鳥のさえずりパターンの解析から言語の起源へと迫っていくお話は非常に斬新で興味深く、大きな衝撃と刺激を受けました。

参加者や登壇者同士で質問を出し合ったトークセッションは、それぞれの好奇心を満たしきるにはあまりに短く、報告会が終わった後も、場外での議論の延長戦は尽きませんでした。



「君は地球を救えますか？」

話は今から8年前にさかのぼる。京大時計台記念館での和やかな伯楽面接を終え、少しリラックスした気持ちで隣の部屋の扉を開いた僕は、大きな机の向こう側に座られている松本紘元総長と強面のガードマンの方（に見えたが、後で有名な理事の先生と知る）の威圧感にまず固唾を呑んだ。そして、面接の冒頭で尋ねられたのがこの言葉だ。「君の研究はヘルスケアに関わるんだろう。その研究が進み、寿命が延びて人口が増えれば地球環境に悪影響を及ぼすかもしれない。君の研究は、地球を救えるのか？」このような問いであったと思う。どのように返答したかは、あまり覚えていない。目の前の研究を着実に進めることで、それが将来地球を救うことにつながるかもしれない、そんなことを無我夢中で答えた気がする。意気消沈して時計台を後にしたが、その後幸いにも白眉第1期生として採用され、本当にかげがえのない仲間とめぐりあえた。昼は非日常的な研究の現場を体験し、夜は皆で杯を酌み交わし自由に熱く語り合った屋久島。「四十歳で五つの会社の社長になる」という著書を一人に何冊も配ってくださり、思いを1時間以上ぶっ通しで語ってくれた船井電気船の船井哲良元会長との親睦会。異分野の話に心がピクピクし、自分の無知を恥じることなく率直に意見をぶつけあった研究会。それまでの僕の狭い世界の想像におさまらぬすごい研究者たち、また人間的にも尊敬できる仲間に出会えたのは、何ものにも代え難い貴重な経験だった。そして強烈な個性を持つ白眉の個人々人からなるネットワークは今後も広がり続け、僕らの予想を遥かに超える強力な絆になりえると思う。

幸いにも僕は今、京都大学 iPS 細胞研究所で研究を続けられている。この4月からは副所長、学系長という身の丈に合わない仕事を任されることになった。いろいろなことを経験できる環境に感謝しつつも、研究に費やす時間が減っていることにオロオロしながら、今しかできない面白い研究を成し遂げ、その苦勞と興奮を研究室のメンバーと共有しようと心に決め、日々を過ごしている。ちなみに、「研究室の人たちを育てなければ、苦勞をしっかりと共有しなさい。」と仰ってくださったのは堀先生（白眉前プログラムマネージャー）だ。苦勞を共有するには覚悟がいる。その気概をもとと暗に堀先生は仰ってくださった気がする。こんな感じで白眉時代の何気ない会話や共有した空間を、ふとした日常の最中に思い出す。冒頭の松本元総長の言葉もその一つだ。これは繰り返し僕の頭に巡ってくる嫌ではない難問だ。そもそも僕は、「地球に優しい」という表現にどこか人間の奢りを感じられ好きではないのだが、この質問はどこか人間の嫌悪感を感じさせず、何かまだ答えは見いだせていないが自身の研究の指針になる予感がしている。地球を救えるかはわからないが、いつか自分の研究を通じ、子供たちの世代が幸せを感じられる社会作りにも貢献できたらいい。これが今素直に心に浮かぶ、ぼんやりした野望だ。（さいとう ひろひで）

齊藤 博英

第1期特定准教授、在職2010年4月1日～2014年9月30日 2014年10月1日より京都大学 iPS 細胞研究所教授



2017年度齊藤研究室メンバーと一緒に

ポスト白眉の日常

北村 恭子

第3期特定助教、在職2012年4月1日～2015年2月28日 2015年3月1日より京都工芸繊維大学大学戦略推進機構系グローバルエクセレンス 講師

白眉を卒業して、3年が経とうとしています。机も何もない部屋から始まり、今年度は、学部4回生から修士2回生まで、8名の学生が所属する研究室らしい研究室になりました。京都大学にも程近く、最近では週に1度くらいのペースで、同期だった末永さんと勉強会を行っていることもあって、白眉を身近に感じながらの毎日です。卒業後も、白髪の旅や白眉の日で楽しい思い出もたくさん出来ていて、生涯白眉研究者というのを実感しています。

研究室で大変嬉しかった出来事は、昨年度、学部4回生の卒業研究に用意したテーマが、思い通りに上手くいき、また、その学生も一生懸命頑張ってくれたおかげで、特許出願になる発明が出来たことでした。また、配属された6回生の学生が卒業研究の発表会で、「大学に入って初めて褒められた」と喜ぶ姿を見られたのも、とても印象深い出来事でした。（この学生に至っては、先日就職先の人事の方から、大変高い評価

のメールを頂戴し、さらに嬉しい出来事でした。）今では「元氣とやる気があれば、必ず再生させます！」と、「北村再生工場」を自称して、学生さんたちの受け入れを行っています。研究室配属が授業成績（GPA）順で決まるシステムのため、成績に劣等感を持ちがちな学生さんも多くいます。学生さんの噂レベルでは、「GPAの高い人しか入れない研究室」というようなものも存在します。その中で、「この研究室なら、頑張れば飛躍できる」というのを実感してもらえるような研究室にしていきたいと考えています。（実際には、成績のいい子が集まる研究室ほどの人気がない、というところですが…）

さらに、異動後の大きな出来事としては、今年の3月に、主人が本学に着任したということです。結婚後、約1年間、東京と京都で別居婚をしていましたが、昨年度の文科省の卓越研究員制度を利用し、同居を叶えることもできました。

工学系単科の小さな規模の大学です。着任時から学長に、「大学を有名にしてほしい」というミッションをいただき、出来る限りの貢献をと日々奔走しています。小さいながらも国際シンポジウムをやらせていただいたり、高大連携事業に参加させていただいたり、夫婦で同じ大学で働かせていただいたり、あらゆる機会をいただいています。それに応えられるよう、精進していきたいと思っています。白眉の皆さんもお近くですから、是非遊びにいらしてください。（きたむら きょうこ）



2016年度卒業生の卒業論文提出後の喜びの表情 記事中に登場する6回生は一番手前の青年

樋口 敏広

第5期特定助教、在職 2014年6月15日～2015年12月31日 2016年1月1日より Georgetown University, School of Foreign Service, Assistant Professor

白眉で1年半お世話になった後、出身校のジョージタウン大学に戻りました。学生から教員に立場が変わり、最初は戸惑うことも多かったのですが、白眉時代に得た研究の素材、研究者としての心構え、そして社交術(?)をここアメリカでも大いに生かして充実した日々を過ごしております。

所属先の「外交学院」は1919年に設立された全米最古の外交官・国際機関職員養成機関で、日本からも外務省や防衛省をはじめとする各省庁から多くの方々が留学されています(緒方貞子元国連難民高等弁務官や河野太郎外務大臣も本校の出身です)。ただ、ワシントンは単に政治の中心地ではなく、芸術と文化にも溢れています。スミソニアン博物館は全て無料。首都という土地柄、世界各国から難民や移民が集まっており、食生活が貧しいと揶揄されるアメリカでは珍しく本格的なエスニック料理を味わうことができます。また、国立公文書館や連邦議会図書館といった世界的な史料館も集積しているため、毎年春休みと夏休みには日本各地から研究者がどっと押し寄せます。街自体は比較的新しいのですが、どこなく京都を思わせる雰囲気があります。

こちらに来て変わったことといえば、やはりトランプ大統領に象徴されるアメリカ政治社会の激動が挙げられます。移民制限、人種差別、経済格差、そして対外政策の迷走といった問題は研究と教育にも深刻な影響を与えており、私の勤務校でも研究費の削減や学生に対する差別的言動が大きな問題となっています。同時に、危機の時こそ改めて歴史を学び直し

たいという機運も学生の間でかつてないほど高まっています。私が教えるアメリカ外交史の授業でも受講生が昨年に比べて倍増し、皆が真剣に議論を繰り広げています。将来に対する不安が増す中で過去からどのように学ぶべきか、「温故知新」の精神に則って学生や同僚と共に考えていこうと思います。

(ひぐち としひろ)



勤務校です。USJのハリーポッターのお城ではありません!

Y UMEKUSA

エッセイ

移民と競争の国アメリカ

12年間、アメリカのボストンに住んでいた。ボストンはとても美しい街だ。それに、僕のような外国人も受け入れてくれる懐の深いリベラルな街だ。2013年4月15日、ボストンマラソンで爆弾テロが起きた。3人が死亡し、282人が負傷するという惨状が引き起こされた。次の日、いつもは活気のある街が厳戒態勢となり、凍りついたように静かになった。誰もいない街の空気は、緊張感で張り詰めた。犯人は、僕がいつも仕事をしているビルの前で、MITの警備警官を射殺し逃走。大掛かりな捕り物の末に逮捕された。事件当時は、イスラムの

雨森 賢一

テロかと疑われたが、実際の犯人はホームグロウンの移民二世だった。彼らの家は、僕の家のおそばだった。彼らが通った立派な高校もすぐ近くにある。僕は、彼らと同じ風景を見て過ごしていたことになる。事件後、犯人の動機についてはあまり語られなくなった。でもボストンの人は、本当は気づいているはずだ。ボストンは日々発展し、美しいけれど、美しさゆえの矛盾がある。アメリカは移民の国。オープンだけど、僕らのような移民は、能力を超える適応が求められる。アメリカは競争社会。競争は希望を生むけれど、ドロップアウトには「信じて努力したのに裏切られた」という僻みが残る。でも、怒りに任せてテロを起こしたところで、何もならない。誰も幸せにならないし、誰も耳を傾けない。競争もほどほどにして、しっかりと自分の本心と向き合うことが、本当は大切なのだ。多様な価値観を社会で共有する努力が、移民の国アメリカには必要なのだ、と人は言う。言葉では簡単だが、これほど難しいことはない。アメリカは今、どこまで移民を受け入れればいいのかわからない。トランプの時代になり、移民政策はさらに厳しくなった。アメリカは、移民を受け入れるべきか、排除するべきか、二つの極端な考えをぐるぐる巡らしながら、常に苦しんでいる。ボストンはリベラルで、とても美しい街だ。でもやっぱりお金持ちのための街。みんなちょっと背伸びして、生きている。(あめもり けんいち)



MIT PoliceのSean Collier氏はキャンパスの警備中に犯人に射殺された。その後、多くの献花が集まった。

村主さん追悼記事

第1期白眉研究者であります、村主^{むらぬしたかゆき}崇行殿（享年33歳）におかれましては、平成29年7月11日（火）御逝去されました。ここに謹んでお知らせします。同じく第1期白眉研究者でありますNathan Badenochさん（京都大学 国際高等教育院・東南アジア地域研究研究所 准教授）と、第2期白眉研究者であります沙川 貴大さん（東京大学大学院 工学系研究科 准教授）から、村主白眉との思い出についてご寄稿頂きましたので、以下に掲載させていただきます。

村主のこと

東京大学大学院工学系研究科 沙川貴大

村主崇行さんの訃報を知ったとき、あまりに突然のことで、信じられない思いでいっぱいでした。今でもまだ現実のこととは思えない気持ちが、どこかにあります。

彼は学部一回生のときからの友人でした。そこで以下では、あえて敬称を略して「村主」と呼ぶことをお許しください。

高校の頃から、村主の噂を聞いたことがありました。京都の洛南高校にすごく個性的な天才がいるというのです。京大に入ったらその人に会えるのかな、などと僕はぼんやりと考えていました。

そして2002年4月、京都大学理学部に入学して初日のガイダンスで、たまたま前の席に座っていたのが、村主でした。それが彼との長い付き合いの始まりでした。

僕たちはともに物理と数学に強い興味と憧れを抱いていました。ほどなくして共通の友人も多くでき、皆で色々な自主ゼミをするようになりました。ランダウ＝リフシッツの『力学』、『場の古典論』、それから『統計物理学』。数学の『多様体の基礎』や、圏論や量子情報の勉強会もしました。よく輪読に使った理学部五号館の小さなセミナー室は、歩くと床がギシギシ鳴るような古ぼけた部屋でした。黒板の前にはチョークが何年も降り積もって層をなしています。そこで村主はいつものように、大きな身振り手振りで楽しそうに話していました。それは僕たちが十八歳だった頃の京都の初夏の風景と一緒にあって、いまでも鮮明に蘇ります。

村主は、僕が知る中でもっとも自由な発想をする人でした。それは巷で言うステレオタイプな「頭のいい人」とは全然違います。もちろん彼は飛びぬけて頭がいいのですが、大切なのはそこではありませんでした。物理・プログラミング・宇宙にとどまらず、あらゆる物事に興味を示し、そこに関連を見出し、そして何よりも、普通の人々が常識だと思って気にもしないことの中に新しい発想の種を見つける、村主はそういう人でした。

学部の四年間、数えきれないくらいの議論を通じて僕が彼から教わったことは、人間がちっぽけな頭の中で考えることなんかより、この世界はもっとずっと広くて豊かなんだから、僕たちはもっと自由に考えていいんだ——ということでした。

学部を卒業したあと、僕は東京の大学院に行き、白眉として京都に戻って再び村主と同じ所属になり、そしてまた東京に行きました。その間の時間はとても慌ただしく過ぎ去ってしまいましたが、彼から教わったことはずっと自分の中で生きていたように思います。そして会うたびにいつも、新しい刺激をもらいました。

きっとそうやって彼は、色々な分野の、多くの人に影響を与えてきたのだと思います。

村主がいない世界は、ぽっかりと大きな穴が開いたように感じます。でも彼が残したものは、確実に僕たちの間に生きています。そして彼の蒔いた種を一粒でも拾って育てていくことが、僕たちの役目であるようにも感じています。

Conversations with Muranushi-kun

N. Badenoch

Muranushi-kun was not able to come to my Hakubi seminar on Linguistic Diversity and Social Resilience in 2010, but shortly after he emailed to ask me for a copy of the PowerPoint. As we had not yet had much chance to talk, I was a bit surprised that he was interested, but at the same time encouraged to know that other people in this group were thinking about ideas like 'assessing diversity'. I knew that we would be communicating across some major academic lines, given the very different research topic, approaches and academic lexicon that we used – me spending time in rural Laos with speakers of small and endangered languages, he in his lab pushing the frontiers of technology and its applications. Yet, maybe there was something to this cross-disciplinary dialog that the first Hakubi batch were trying to institutionalize.

Several months later, I got an email from Muranushi-kun with the subject "Linguistic Diversity, Artificial." In the course of our ensuing exchanges, he suggested a comparison between Chomsky's linguistic theory of Universal Grammar and the concept of Turing Completeness in computing capacity. He also explained the various purposes for which programming languages are created: object-oriented programming, functional programming, logical and declarative programming, and with different concerns for use, like message passing, the concept of Type, dynamic and static typing, type inference, polymorphism and many others. In our back-and-forth, he shared with me how people in his field get attached to certain programming languages, and also opened up about his own struggle with the power dynamics of programming languages. I heard a message of how for him artificial languages are, like natural languages for me, social constructs.

I was fascinated by his personal story of how diversity affected programming work, narrated in the direct yet warm style that he was so comfortable in. For him and his programming, it was many languages for many operations:

"So I use multiple languages. I use C++ and its brothers to write programs for supercomputers. I use Ruby for daily household matters. I use Haskell for problems that need careful thinking. I can show you something fun: <https://github.com/nushio3> Here, I published a Haskell program that generates a Ruby program that generates a C++ program. This is no joke! I've been benefitting from this Cprb these days. I'm eager to learn more languages."

Fun, indeed! This was starting to resonate with my experiences with multilingualism in Southeast Asia. This was the thing – we were engaging on technical debate about the similarities and differences between natural and artificial languages, coming from such different backgrounds and approaches. Where we connected with each other most deeply was

in talking about the personal relationships we had to the different languages we used in our work. Not the type of connection I had expected, but full of meaning and significance. In the end, we came to articulations of the same belief, that diversity is good for resilience, as one (or society) has more creative resources on hand, that can be both a practical tool, as well as a limitless source of inspiration, to deal with the unexpected challenges that are a normal part of life. In fact, the future depends on it.

Muranushi-kun was a scientist of astounding breadth and depth, a font of encyclopedic knowledge. I think it is safe to say that everyone who knew him was profoundly impressed, perhaps overwhelmed with this fact. His thirst for new ideas and enthusiasm for opening his mind to different perspectives was inspiring. His grasp of the way the cosmos worked across the many layers of life on Earth, and probably beyond, was awesome. He spoke briefly, but poignantly, about his time in the United States, as crucially formative in his scientific pursuits. My exchanges with him were often focused on that first issue of diversity and communication, just one of the many, many topics he could engage on. It was hard to know which topics were inside and which were outside his area of specialization – this question did not seem to bother him. Once, he described how his internal thought processes worked when processing new concepts in programming: "I can tell from personal experience how a good concept may initially seem like rubbish to me, then it becomes a mystery, and then too academic. Then I come to admire it, and finally it becomes a part of my life, and I'll do anything to avoid using a language that lacks this concept". Honest, critical, adaptive and passionate.

He also brought fun and excitement to his Hakubi life and the many discussions that we were all involved in with him. Academics is a serious venture. The pressures of tenure, funding, data access, impact factor, analytic integrity and all, are certainly enough to keep us, well, serious, and tensely poised on the edge of our seats. But for me, Muranushi-kun's intense, yet informal and genuine style of communicating, expression of *waku-waku* at every new discovery, as well as the simple enjoyment gained from being with people that were thinking and doing interesting things, are a major contribution of his to the Hakubi community. Perhaps these are the basics of research that many of us hold dearly, even as we may sometimes lose sight of them in our daily lives. We can only imagine to what heights his work would have taken him, and the contributions he would have made to our future. I can see him at the front of the seminar room, hopping smoothly up onto the chair into his preferred *seiza* position, leaning forward into the discussion, formulating his questions and comments – with the gleam of an exceptional intellect in his eye, and the smile of a guy who thoroughly enjoyed what he was doing.

受賞・報道

シルビア クロイドン 特定助教が第9回京都大学たちばな賞「優秀女性研究者奨励賞」を受賞しました（2017年3月3日）。

メディア掲載記事

週刊エコノミスト臨時創刊『ザ・関西』2017年3月27日号の53ページに「京都大学究極の“放し飼ひ”白眉プロジェクト 既成の枠組みに収まり切れない若手を支援」という記事で、光山 正雄 白眉センター長のインタビュー記事が掲載されました。

石本健太 特定助教の「ヒト精子遊泳パターンの数式化」に関する研究成果が、BBC News（2017年3月20日）、The Japan Times（3月25日）、Daily Mirror（3月27日）、その他メディアで紹介されました。

細将貴 特定助教の研究内容が、「ヘビの歯並び エサと関係」等として毎日新聞京都版（2017年3月20日）、朝日新聞（4月13日）、信濃毎日新聞（5月6日）、河北新報朝刊（5月20日）に掲載されました。

前野ウルド浩太郎 研究者（現：JIRCAS 所属）の著書『バッタを倒しにアフリカへ』（2017年5月17日出版）が朝日新聞にて紹介されました。（2017年7月2日掲載）

置田清和 特定助教、榎戸輝揚 特定准教授、および グルーバー シュテファン 特定准教授が、京都大学で開催された第3回 TEDxKyotoUniversity で講演をされました（京大芝蘭会館稲盛ホール、2017年7月8日）。

山吉麻子 特定准教授の「核酸医薬開発および DDS 開発」についての研究紹介が、日経バイオテック（核酸医薬アップデート）に掲載されました（2017年9月6日号オンライン記事）。



書籍

Kasai Yukiyo unter Mitarbeit von Hirotohi Ogiwara
"Die altuigurischen Fragmente mit Brāhmī-Elementen". (Brepols Publishers, ベルギー王国, 2017年2月)

金 宇大
『金工品から読む古代朝鮮と倭——新しい地域関係史へ』（京都大学学術出版会, 2017年3月）

和田 郁子, 小石 かつら
『他者との邂逅は何をもたらすのか——「異文化接触」を再考する』（和田郁子, 小石かつら編）
（昭和堂, 2017年3月）



『白眉センターだより』第14号

2018年■月■日発行
編集・発行 京都大学白眉センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL: 075-753-5315 FAX: 075-753-5310
Eメール: hakubi@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/

印刷 株式会社 サンワ
©2018 The Hakubi Center, Kyoto University